

自然誌 だぶり

Natural history



三重自然誌の会情報誌 133号

2022年 9月

トカゲが庭で産卵

今年の梅雨明け宣言はやけに早いなと思っていたら、案の定判断ミスで、実際の梅雨の終わりは7月下旬だったと、小さく新聞記事になっていました。そんな梅雨の合間の6月25日、家庭菜園の手入れをしていたところ、土止め用に置いていた大型鉢の下でニホントカゲが産卵しているのを発見しました。サラ状の巢内に8卵あり。発見時は親が尾で卵を包み込むようにしていましたが、すぐに警戒して動き出しましたので、そっと鉢を戻しました。この土止めは、不格好であると妻から苦情がきていたので、取り除くつもりでしたが、そのままにしておきました。観察が卵の放棄を招くのではという不安もあり、頻繁には確認しませんでした。7月上旬には白かった卵が薄茶色を帯びており、中旬にはふ化したのか卵はなく、親だけを確認しました。巢内に卵殻もまったく残されてなかったので、蛇等に捕食されたのかもしれませんが、あるいは、ふ化後の殻は親が処分するのでしょうか。なお、卵の世話をするのはメス親であることを本会の梅村有美さんに教えてもらいました。



写真 左上：中央左よりの鉢の下に産卵，左下：発見時にはメス親が尾で卵を抱えていた，中央：浅いサラ状の巢に8卵を確認した。

(清水 善吉：松阪市日丘町1386-17)

「ダントバ」を知っていますか？

中 優

6月半ばのことだったと思うが、南伊勢町に住んでいる幼なじみの田畑敏成君（以後彼とする）との会話の中で、「ダントバ」なる言葉が出てきた。彼が言うには、南伊勢町（旧南勢町）伊勢路の上の地区では旧5月の節句にダントバに赤飯、破竹と生節を甘辛く煮たのをに入れて包み飯とし、その包み飯を大きいヨモギとショウブにからげ、それを「成った、成った」と言っ神棚と仏壇に供えていたと。また、この包み飯についてはかなり前ではあるが三重県の地域雑誌である「NAGI 風」に紹介されたことがあると。この包み飯についての彼との話の中で、私が気になったのは「ダントバ」であり、いったい何の葉であるのか。彼の実家と私の実家は直線距離でわずか4kmであるが、私は初めて聞いた言葉であり調べてみることにした。

最初は、彼から提供されたダントバの包み飯の写真1を尾鷲市の山本和彦さんにLINEで送り、何の葉であるのかを問い合わせた。ただ送った写真だけではよく分からないとのことなので、彼に頼んで葉の実物を手に入れ、7月初めに葉を写した写真2を山本さんに再度送った。その結果は「イイギリかアブラギリ」であろうとの回答であったので、私は所有する図鑑で調べてダントバは「イイギリ」であるとの結論に達し、彼に伝えた。もちろん山本さんにも、葉の形が似ていることや葉柄が長いことに加え、結論に至った決定的な根拠は尼川ほか（1988）に次のような記述があったからである。「イイギリは飯桐の意で、むかしこの葉で飯を包んだことによる」。

しかしながら素人の悲しさ、正解は別にあった。私との一連のやりとりの中でさすが山本さんだと感心したのは、イイギリであるという私の結論に同意の返事が中々来なかったことである。つまり、イイギリではないだろうとの思いが山本さんにはあったと想像する。それどころか、四日市市の市川正人さんにも問い合わせをしてくれ、新たな選択肢として「キササゲ」を提供してくれたのである。市川さんからは花あるいは実を見れば「イイギリかキササゲのどちらかはすぐ分かる」とのアドバイスをいただいた。そうこうしているうちに7月半ばに彼から決定的となる写真3が届いた。それには細長い実を房状に付けた木が写っていた。つまり「ダントバ」は「キササゲ」のことだったのである。その後、私は彼の実家近くを通る県道719号伊勢路伊勢線沿いで野生化しているキササゲを確認したが、この野生化していることは市川さんからすでに情報を得ていた。

ただ、「キササゲ」は佐竹ほか（1989）によると、中国原産で薬用あるいは観賞用として栽培されてきている歴史があり、伊勢路の上の地区での包み飯の慣わしとキササゲがどのように結びついたのかについて興味を惹かれる。私は神社におけるサカキがオガタマノキの代用として今日では一般的になっているように、キササゲはイイギリの代用として利用されるようになってきたのではないかと考えている。

末尾ながら、数々の情報を提供いただいた山本和彦氏、市川正人氏に感謝する。また、写真の掲載を快諾してくれた幼なじみの田畑敏成君に感謝する。

引用文献

佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫1989. 日本の野生植物 木本Ⅱ. 平凡社、東京、305p.
尼川大録・長田武正1988. 検索入門 樹木①. 保育社、大阪、207p.



写真1 包み飯



写真2 ダントバの葉



写真3 キササゲ

(なか まさる：伊勢市小俣町本町 1284)

宮川中上流域で数種の希少シダの生育を確認

宮 島 美 栄

私がいつもシダ探索と称して野外観察に行っている宮川の中・上流域（大台町，大紀町）境界にて，三重県レッドデータブックで絶滅危惧IB類のオクタマシダの確認に関しては報告した（宮島2021；本誌128号）．今回は準絶滅危惧種の種も含め，他のシダについて報告する．

以前から大台町の宮川支流の谷である大熊谷では準絶滅危惧種であるオワセベニシダ（オシダ科）の生育が複数カ所で複数株確認されているが，この度新たに湯谷峠に向かう国道422号の旧道，栗谷川沿いで高さ3～4mの幅で長さ40m程の法面，崖に20株弱のオワセベニシダを確認した（写真1）．どの株もよく成長した立派な個体群であり，余程自然な状態が保たれていたのだろうと推察された．嬉しいことである．これで大台町では大熊谷と池ノ谷林道，今回の栗谷の3ヶ所においてオワセベニシダの生育を確認したことになる．

また，池ノ谷林道では県レッドリストには載らないが，希少なヌカイトチシダマガイ（オシダ科）も数株確認している（写真2）．そして今回一番の発見は，雑種であるためレッドリスト対象外のハマシダの生育確認である．ハマシダはチャセンシダ科のクルマシダとコウザキシダの雑種であるが，大紀町神原の発見場所は両種が混在する崖で，複数株が確認できた（写真3）．

最後にホウビシダ（チャセンシダ科）の群落を大台町長ヶの宮川本流沿いの県道脇法面で確認した（写真4）．本稿についてご助言をいただいた当会の山本和彦氏によれば，ホウビシダは三重県内では中部以南の地域で散見されているとのことだが，ヌカイトチシダマガイと同じく全国的には希少シダであるので報告する．しかしその後観察に訪れた際，草刈りが行われたらしく散々になったホウビシダを確認した．地元では「草刈り」は必須であり通常であるのは理解するが，よく蔓延る繁殖力旺盛な外来種とか，繁茂する蔓系の草なら納得する．しかし，ホウビシダなどは岩から垂れ下がるだけで何も道路に影響はない，そういうものまで刈ってしまうのはどうしたものか，と考えさせられた．予め自治体や地元自治会に提言しておくべきなのか，その件に関し当会の清水善吉氏に早速助言いただいた．私が自分で配慮・要請などをすればよい，ということであった．なるほど．（みやしま みえ：大台町上三瀬52-1）



写真1 オワセベニシダのよく成長した株（大台町栗谷，2022年7月22日）



写真2 ヌカイトチシダマガイの新葉（大台町松原，2022年6月3日）



写真3 クルマシダ，コウザキシダが混在する崖に生育するハマシダ（右下）（大紀町神原，2022年3月30日）



写真4 ホウビシダが群生する崖（大台町長ヶ，2022年7月15日）

「巻き」が外れたカタベガイ

中野 環

20年以上昔になりますが、紀北町在住の中野恒夫さんが南伊勢町にある『愛洲の館』で貝類標本を展示されたことがあります。展示室の一角に、貝殻背面にある大小白斑模様が美しいタカラガイの姿からは想像がつかないくらい一様に灰緑色をしたホシキヌタ *Lyncina vitellus* (Linnaeus, 1758) や水管溝が曲がったナガニシ *Fusinus perplexus* (A.Adams, 1864) など、変形した個体が木製標本箱に入れられて展示されていました。不確かな記憶ですが、「今、海で何がおこっているのか?」というキャプションがついていたかと思います。私にとっては印象的な展示でしたので、この展示を見てからは採集する時に意識して変形した貝殻も集めるようになりました。

変形した個体は「フリーク」と呼ばれます。フリークになる原因はいろいろと考えられますが、突然変異などの理由で殻が成長初期の段階から変形している個体では、例えば、縫合のくびれや周縁の角張りの表れ方の程度が異なるものの、全体的に整った形状を保っているのが標準的な個体と類似しています。貝殻を形成する外套膜に怪我を負ったり、外敵に破壊された貝殻を修復しながら成長した個体では修復痕がみられます。破壊された段階から変形が生じるので歪な形になり、時には別種のように見えることもあります。また、フジツボ類や棲管ゴカイ、カキ類などが付着することで成長阻害や成長方向が変更されることもあり、このような個体は、貝殻の形状が大きく変形することがあります。

2022年1月29日に南伊勢町贅浦で採集した複数のカタベガイ *Angaria neglecta* Poppe & Goto, 1993 の中にフリーク個体を確認したので報告します。通常は殻口がある位置まで「巻き」が離れることはありませんが(写真-1)、この個体は、他の個体に比べて螺塔が高く、貝殻にはフジツボ類やカキ類などが



写真 1: No.20925 カタベガイ(贅浦 2022.01.29 通常個体), 2: No.20925 カタベガイ(贅浦 フリーク), 3: No.21021 カタベガイ(2011.01.15 贅浦 フリーク), 4: No.1072 カタベガイ(1983.08.03 宿浦 フリーク), 5: No.1071 カタベガイ(1985.12.23 紀伊長島 フリーク)

が多数付着していました。体層と次体層の間に付着したベニガキ *Hytissa quercinus* (G.B.Sowerby, 1871) を除去すると体層から巻きが外れた個体でした(写真-2)。残念ながらベニガキを除去する前のカタベガイの状態を撮影していないので、付着物を除去後の写真だけでは判りにくいかもしれませんが、ベニガキが付着したことでカタベガイの成長方向が変更されてフリークになったと考えられます。

古い標本を整理している中で、2011年1月15日に南伊勢町贅浦で採集したカタベガイも巻きが体層から離れている個体でした(写真-3)。付着物は既に除去していましたが、この個体も体層と次体層の間にカキ類が付着していたことでフリークになったと考えられます。また、死殻で既に目

立った付着物が認められない個体なのでフリークになった原因は不明ですが、1983年8月3日に南伊勢町宿浦で採集した個体（写真-4）や1985年12月23日に紀北町紀伊長島で採集した個体（写真-5）も巻きが外れた個体です。

このようにカタベガイでは巻きが体層から離れるフリーク個体をしばしば見ることができるようです。池田 等（2017；美しき貝の博物図鑑，成山道書店）は、巻きが体層から離れたリュウキュウカタベ *A. delphinus* (Linnaeus, 1758) の個体を図示した上で、カタベガイでもしばしば見受けられると記述しています。今後は、たくさんの個体を観察してフリーク個体の出現割合なども調べたいと思います。
(なかの たまき：度会町大野木1711-1)

アメリカピンクノメイガ発生記録

中西元男

アメリカピンクノメイガ *Pyrauta inornatalis* (Fernald) は、前翅長1cmに満たない小型種ながら前翅表面が鮮やかな濃いピンク色で、翅を屋根型にして止まっているとピンクの正三角形マークにみえる可愛い蛾である。アメリカ、メキシコなどが原産地の外来種で、国内では2019年に岐阜県で発見されたという。

1年ほど前、松阪市新町の筆者自宅庭でブロック塀に止まっているものをみつけたがその時は知識がなく、えらいハデなメイガがいるもんだと思っただけで見過ごしてしまった。最近あちこちの虫誌でとりあげられるのをみる機会が多くなり、撮影もせず記録も残さなかったことを後悔した。園芸植物のサルビア類の害虫とされ、庭の一角にいつの間にか繁茂したサルビア・サクラブルコが発生源であろうと注意していたところ、この度発生を確認することができた。

2022年6月16日朝、「小さい虫をペチッとたたいたらキレイな蛾だった」とウチの奥さんが示した虫は、形が崩れてしまっていたが、どうやらピンク色が残っている。さてこそ、と庭に出てサルビアを揺さぶってみたところ、小さな蛾がいくつも飛び出した。飛んでいる時は翅裏面や後翅の茶色が勝ってあまりパツとしない。おまけに葉裏とか花穂の下面に止まってしまうため、翅表が確認し難くもどかしい。何度か飛ばしているうち、ようやくやや高い位置に静止してくれてそれらしい姿を撮影することができた（写真1）。

この蛾に関する最近の報文、長田ら（2022）、宇野（2022）では既産地として、発見地の岐阜県の外に滋賀県、兵庫県、大阪府、奈良県が挙げられているが、三重県は言及されていない。発見状況からみて既に広く拡散していそうであるが、県内未記録の可能性が高いと思われるので報告する。

なお、6月29日にも松阪市大黒田町のホームセンターの園芸コーナーでサルビア類に飛来した1頭を目撃した。

写真から種同定していただき、本種につきご教示くださった間野隆裕氏、発生を気づかせてくれた中西睦子氏に感謝する。



写真1 アメリカピンクノメイガ(2022年6月16日、松阪市新町)

引用文献

長田庸平・桂考次郎・奥野春三・市川顕彦2022. 大阪府大阪市におけるアメリカピンクノメイガの発生の記録. *Nature study* 68 (4) : 6-7.
宇野宏樹2022. 兵庫県西宮市におけるアメリカピンクノメイガの記録. *蛾類通信* (301) : 5-6.

(なかにし もとお：松阪市新町959)

三重県に侵入した外来種の直翅類

河 北 均

地域における外来種の消長については四段階に分けられます。本稿では主に三重県を例に解説します。第一段階として近県で記録され、近い将来、三重県に侵入が予測される種です。第二段階は既に三重県に侵入し、県内で分布が拡大途上にある種。第三段階は三重県下ほぼ全域に普遍的に分布する状況になった種。最後の第四段階は、普遍的に広がった後、衰亡して絶滅した種です。

三重県における外来種の直翅類（多新翅類）についての現況は次のとおりです。

第一段階…アリガタツユムシ *Isopsera sulcata* Bey-Bienko (直翅目), タイリククサキリモドキ *Phyllomimus klapperichi* Beier (直翅目), アメリカカンザイシロアリ *Incisitermes minor* (Hagen,) (シロアリ目)。

第二段階…ウスグモスズ *Metiochodes genji* (Furukawa) (直翅目, 写真1), アカハネオンブバッタ *Atractomorpha sinensis sinensis* Bolívar (直翅目), ツマグロツユムシ *Deflorita apicalis* (Shiraki) (直翅目), ムネアカハラビロカマキリ *Hierodula* sp. (カマキリ目)。

第三段階…クロゴキブリ *Periplaneta fuliginosa* (Audinet-Serville) (ゴキブリ目) (外来種かは異説もあり), アオマツムシ *Truljalia hibinonis* (Matsumura) (直翅目, 写真2)。

第四段階…カマドコオロギ *Grylloides sigillatus* (Walker) (直翅目)。

野外に生息するのは以上と思われるが、このほかに屋内でフタホシコオロギ *Gryllus bimaculatus* Degeer (直翅目) とイエコオロギ *Acheta domesticus* (Linnaeus) (直翅目) が津市などのペットショップで販売されています。このうち、フタホシコオロギは屋外に逸脱した例があります(河北1995; ひらくら, 39 (5))。また、第一段階以前の種、いわゆる史前帰化昆虫については、推測以上のことは分かりません。このうち、第一段階～第二段階については、動向に注目すべきだが、これらを把握すべき三重県在住の人材が少ないのは残念なことです。

第一段階、つまりアラートリストとでもいうべき種のうち、アリガタツユムシは滋賀県、タイリククサキリモドキは愛知県、アメリカカンザイシロアリは和歌山県など近県にそれぞれ分布しており、近い将来、三重県に侵入する可能性があるため、注視する必要があります。三重県の直翅類以外の昆虫では、アルゼンチンアリ *Linepithema humile* (Mayr) などがあります。

第二段階は、現在、既に三重県に分布している種です。ウスグモスズは県下全域、アカハネオンブバッタは伊賀・中勢地方、ツマグロツユムシは北勢地方、ムネアカハラビロカマキリは伊賀地方から記録があり、今後、県内各地への分布拡散が注目されます。三重県の直翅類以外の昆虫では、キマダラカメムシ *Erthesina fullo* (Thunberg), タイワシタケクマバチ *Xylocopa (Biluna) tranquebarorum tranquebarorum* (Swederus) など多くの種があります。

第三段階になると、イネミズゾウムシ *Lissorhoptrus oryzophilus* Kuschel のようにあまりにも普通になるので、当たり前になってしまい、かえって注目されなくなります。

第四段階は普遍的に生息するようになったと考えられた後、様々な要因で再びいなくなった種です。三重県ではカマドコオロギがこれに該当すると思われます。カマドコオロギの場合、三重県内の絶滅要因は明確であり、人間の生活様式の変化、竈からプロパンガスへの移行時期に本種が産卵できず生息場所を失ったことが原因です。

第一段階～第二段階のうちに動向の注意を喚起され、些細と思われてもデータを公表されることを切に願います。それが三重県の自然の変遷を解明する第一歩ですから…。

(かわきた ひとし：伊勢市岡本1丁目17-18)



写真1 ウスグモスズ



写真2 アオマツムシ

あるカイツブリの営巣

上 田 利 彦

皆さんは『鳩の浮巣（におのうきす）』をご存じでしょうか？鳩はカイツブリの別名で、その巣が水面に浮いていることからこう呼ばれています。水面で営巣するのは、外敵、特に陸上からの捕食者に対しては有効な方法だと言えます。今回、北勢地区のとある住宅団地の調整池で観察したカイツブリの営巣について報告します。

この調整池は周辺地盤より数メートル深く作られており、周囲を直壁で囲まれ、幅3メートルほどの平場があり、さらにその内側が直壁で深く掘られた構造で、すべてがコンクリート築造となっています。また、水位は排水口により常時は平場より低くなっています。その水面にはヒシがまばらに生育しています。コンクリート張りの平場は壁際の所々に土壌が薄く堆積し、そこに少しばかりヨシなどの植生が見られます。昨年夏にカイツブリの番とひなが生息していることを確認しましたが、水面およびその周辺にも巣らしきものは全く見当たりませんでした。おそらく壁際のヨシの植生のどこかに巣があるものと考え、池の周囲に張られたフェンスの外側から双眼鏡で探しましたが見つかることはできませんでした。

今年の5月、調整池の中に入る機会があり、早速、植生のある場所をじっくり踏査してみましたが、巣は見当たりません。この間、カイツブリは私から遠く離れた水面で番が別々に浮かんでいました。一通り見て回って、ほぼ諦めながら何気なく足元にあった直径40cmほどの枯れ草の丸い塊を足で15cm程ずらした時、ちらっと白い卵が目にはいり、その塊が巣であることに気がきました。そっと上に被さっていた枯れ草をどけるとそこには白い3つの卵が鎮座していました。踏まなくて良かったと思いきや、写真を数枚撮った後また枯れ草をもとに戻し、そっと離れました。

この間、素手では一切触れなかったものの、自分の不用意な行動により抱卵を放棄してしまっていないかと気になり、数時間後にフェンスの外からそっと覗くと、親鳥が抱卵している姿を一瞬見ることができましたが、私の姿に気付いた親鳥はすぐさま巣から離れ、一旦巣の方に振返ると巣の上に枯れ草を被せ、方向転換してそそくさと池に入り中央の方へ泳いでいきました。この間ほんとは一瞬で鮮やかな動きでした。枯れ草を被せられた巣は完璧に隠蔽されていました。この状態ではだれが見ても巣とは気づかれないでしょう。さらに数時間後・翌日と観察に行きましたが、調整池へのアプローチを巣から離れた対岸からとしたにもかかわらず、観察を始めるとすぐに巣から離れてしまいます。また、さらには対岸の道路に止めた車の中からの観察でも同様でした。私の姿は親鳥の脳裏にブラックリストとして焼き付いてしまっているようです。観察がストレスになっていることは明らかなので、その後は観察を行っていません。

話は飛びますが、毎年5～6月にかけ、田んぼのあぜ道ではカルガモの営巣がみられますが、あぜ道の除草作業時、巣を確認した場合その前後数メートルは除草せずに残しておくにもかかわらず、数日後には卵が無くなったり周辺に殻が散乱したりしてしまいます。これらはおそらくカラスやキツネなどの捕食者による仕業だと思われます。こうしたことを考えると、今回観察の鳩の巣は陸上からのアプローチが可能で、環境的には全く無防備であると思われるが、親鳥が巣を離れるときに巣を隠蔽す



写真1 隠蔽状態の巣（中央）



写真2 周辺環境。発見時、巣は中央



写真3 巣のようす。卵の左側の乾いた草が隠蔽用の蓋

ることで卵が守られていると考えられ、改めて自然の叡智に驚くばかりです。住宅地なので猫やカラスに襲われることなく無事にひなが孵り、巣立つことを願ってやみません。

(津市久居一色町176-1)

アオサギにおそわれる？



アオサギは魚類や両生類、爬虫類、昆虫等を餌にしており(叶内拓哉2008；日本の野鳥第2版，山と溪谷社)，筆者もオオサンショウウオやコウベモグラの捕食事例を報告した(本誌105・129号)。肉食動物であることは間違いないが、人を襲ってくることはよもやあるまいと思っていた。ところが、今年の8月29日に赤目四十八滝の上流でハンザキ調査中に、アオサギに襲いかかれる体験をしたので報告する。川を踏査中の19時30分頃、1羽のアオサギが3mほど前に飛来し、サギ類は一般に目つきが悪いが、さらに睨みを効かせてジリジリと筆者に近づいてきた。目前2mほどに近寄った時に突然、頭上に舞い上がり飛び去ったが、その攻撃のような行動を避けるためにバランスを崩して水中で転び、その拍子に胴長内に水が入ってしまった。幸い、ケガはなかったが、その後の調査は極めて不快なものとなった。これって、襲われたのか？

(清水善吉：松阪市日丘町1386-17)

事務局から

○三県合同フィールドワークを実施

7月9-10日の日程で鳥羽市神島・菅島で実施。和歌山，三重両県から15人の参加，残念ながら奈良県からの参加はありませんでした。奈良の連携団体である「紀伊半島野生動物研究会（事務局・奈良市）」が休眠状態となっており，今後の動向が気になります。その代わりに，バックネル大学（米国）の高橋瑞樹先生と学生二人が参加し，総勢18人の賑やかなフィールドワークになりました。高橋先生方は，オオサンショウウオ研究のための来日で，5月中旬から日本ハンザキ研究所のある兵庫県朝来市に滞在していました。帰国前の小旅行で三重に寄りたいたのことでしたので，参加してもらいました。



編集後記

中さんの報告にあるメールへの返信の取り方について，返信がないのは不同意ということに驚きました。編者は，返信がなかったら同意ととらえています。こんな誤解を避けるためにも，メールにはその都度の返信を心がけましょう。12月発行予定の秋号への投稿をお待ちしています（善）。

自然誌だより133号 Mie Natural History Research Group News, No.133

発行日 2022年9月20日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）
e-mail:shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp